隠岐の島・海士町の離島戦略と「さくらの家」見学会＆フォーラム（活動記録）

企　画■隠岐の島・海士町の離島戦略と「さくらの家」(障害者のための加工場)見学会＆フォーラム
日　時■２００９年１０月３１日（土）～１１月１日（日）
場　所■島根県隠岐郡海士町（隠岐・中ノ島）
主　催■ＴＭＵ都市と住宅を考える会、共催：連健夫建築研究室
協　力■海士町役場、日本建築家協会
プログラム■３１日午後：海士町
菱浦港・キンニャモニャセンター＜見学＞ ～ さくらの家＜見学会＆フォーラム＞ ～
離島戦略施設群（隠岐牛牧場、天然塩施設等）＜見学・説明＞ ～ 交流会＜意見交換＞
■１日午前：隠岐の島町
西郷港～玉若酢命神社＋億岐家宝物殿(国宝駅鈴）～佐々木家住宅～水若酢神社～隠岐郷土館～舟小屋群ほか＜見学＞
■３０日午後、１日夕刻：境港・水木しげるロード（オプション）
フォーラム■２００９年１０月３１日（土）１４時～１６時　於：さくらの家
パネリスト■乾亨氏(立命館大学教授)、後藤隆志氏(元・海士町役場地産地商課ものづくり担当)、
岡本久子氏(さくらの家所長)、進行：連健夫氏(連健夫建築研究室代表)
協力者■澤田恭一氏(海士町副町長)、大江和彦氏(同産業創出課長)、黒田正人氏（同健康福祉課長)、
中川実氏(同地産地商課長代理)、安達雪紀氏(さくらの家指導員)、本多美智子氏（同）ほかの皆様
参加者■連　健夫（コーディネイター）
市古太郎、大竹　亮、小川貴之＊、小川美由紀、梶川義実、呉祐一郎、呉　美樹＊、高見沢邦郎、
田村國勝＊、西田和也＊、藤居由香＊、古里　実、山岡　靖、山崎俊裕＊
（以上１５名、うち会員９名、会員外＊６名　敬称略）
企画主旨■隠岐の島・海士町(あまちょう)は、町長の給与を半分にし、「行政マンは営業マン」を合言葉に、ＩターンやUターンを奨励、地場のたから探しの中で、ＣＡＳ凍結技術による白イカや岩ガキの商品化や隠岐牛、天然塩、福来茶などの特徴ある商品づくりを行っており、離島戦略で注目されている島です。この町にある「さくらの家(精神･知的ハンディキャップ者のための福来茶の加工場)」は、設計時には、皆でコラージュを作りイメージを共有することや投票で案を決めることやタイルのデザイン製作など、また施工時には、壁に断熱材代わりの古新聞詰めや塗装作業、デッキ作りなど、プロセス全体にわたって利用者参加の機会を設けたプロジェクトです。
今回は、海士町の先進的な離島戦略諸施設を見学するとともに、さくらの家の見学会とフォーラムを行い、フォーラムでは「参加のデザイン」をテーマにディスカッションをしました。さらに、国立公園・隠岐のすばらしい自然とともに、後鳥羽上皇が流された歴史ある風土など観光資源を味わう意味でも、良い機会になりました。

隠岐の島・海士町／さくらの家（外観）
※参加のデザインで設計され、3月に竣工した

さくらの家／参加のデザイン・フォーラム
※本プロジェクトの生みの親･乾先生も京都から参加

＜参加者の意見・評価＞

１■海士町の離島戦略について

●海士町のすべてが資源、との発想であり、置かれている条件を最大限に活かし、チャレンジしている姿勢は感動する。地域は、リーダーとそれについて行くチームがうまく構成できれば、大きく変わることを実感できた。(Y．K)

●離島であるがゆえに合併できないことを逆手にとって、町の資源を徹底的に洗い出し、売り出そうとする姿勢に感動しました。町のトップから担当課長、Ｉターンの契約職員までが一丸となって、町おこしに取り組んでいる姿に驚きました。そして、町職員一人一人の取り組みが、町の産業振興にすぐにつながっていることに、うらやましさを感じてしまいました。自治体行政のお手本を見せられたように思います。(M．F)

●離島というのは、他の条件が不利な例えば山岳地域等と比べても、他地域と道路がつながっていないことで、日常生活上、産業振興上、行政サービス上、相当大きなハンディを負っているが、それを逆手に取るように、他ではない地域の魅力を新旧島民がさまざまに発見、発掘し、セールスポイントや地域のアイデンティティの強化に活用し、たくましく暮らしている前向きさ、行動力に、驚きとすばらしさを感じました。農地も多く農業が行われる地域は一般に地域共同体の意識が強く、外部からの新しい島民を受け入れていく気風にどうしてなったのか、短時間では十分理解できませんでしたが、これまでの長年の積み重ねを分析すれば他地域にとっても、大変参考になるものと思います。特に役場の方の働きぶりには脱帽です。(Y．G)

●短い時間でしたが，大変「熱い」空気を感じました。印象的だったのは，島の財政危機をバネにして，住民と役場が同じ立ち位置で取り組みを進めていること。および，Ｉターン事業で若い人たちが活躍の場を与えられ，予算措置，進捗指導，などトータルな支援がなされていたこと。でした。日本各地の，いや，おそらく世界的にもトップを走っている地域だと思います。(T．I)

●離島のデメリットをメリットに変えるというポジティブ・シンキングが、たいへん好感もてた。2,500 人の町のスケールを生かした戦略になって、町民に浸透しているのが素晴らしい。(Y．Y)

●離島であることをメリットとする戦略とその実践とが、システムとしてうまく機能しているように思えました。戦略と実践の一環としてセールスのうまさが光っていたように思います。例えば・・・

1.隠岐牛を東京で打ち出す；隠岐に居ながら他都市（東京）をブランド確立の場所としてしっかり利用。

2.サザエカレー：名物をレトルトカレーにして土産物とするアイデアは他の地方都市でも散見しますが、パッケージのセンスの良さが商品イメージの強さも含め、他の地方都市の商品よりも一つ上を行っているように思います。

課題の一つは首長の替わった後など、今後の事業の継続性のように思われました。(M．O)

島で天然放牧される隠岐牛
※東京の市場では松阪牛並みの評価を受ける

「島じゃ常識・さざえカレー」
※島では当たり前のものを商品開発で売り出す

●例えば、隠岐牛を島根県内ではなく東京市場に卸していること、Ｉターンも遠方の県出身者の話題が多いこと、一つの町単位で全国を相手にされているのが印象的でした。島根県民としては、少しの疎外感を抱き、県内各地の魅力が乏しいのだろうかと考えさせられました。ホテルの冷蔵庫に、ペットボトルではない水が備えられていたのは初めての経験で、成分はミネラルウォーターなのか水道水か、わかりませんでしたが、美味しい水の湧く土地なのだろうと想像させる仕掛けでした。(Y．F)

●地域が本来持っている豊かな資源や、人間が本来持っている潜在的可能性を、背水の陣を敷いて活用していくと、これだけのことが出来るのだということに、驚きました。様々な試みの中には、奇抜なものやうまくいかなかったものもあるようですが、失敗をおそれないチャレンジ精神にも脱帽です。(R．O)
●大きな目標、具体的かつ多様な手段、それらを管理運営する仕組み、そして成果、これらがフィードバックしながら進化を続けている姿に感銘を受けました。(K．T)

菱浦港・キンニャモニャセンター
※島の玄関口であり、役場の3課もここに常駐する

ＵターンＩターン促進のための町営住宅
※小さな島に、5年間で200人もの転入者があった

２■「さくらの家」における参加のデザインについて

●施設利用者と設計者が建物へのイメージを共有化するための手法として、コラージュを使って互いにキャッチボールをしながら、設計を積み上げていく手法に、デザインへの利用者参加のプロトタイプを見る思いがしました。また、設計者にとっても創造性を高める手法であり、利用者との協働設計とも言えるのではないかと思います。施工段階でも利用者参加の工程を組んでおり、建物への愛着を生み、そのことが適正な利用、管理につながるサスティナブル・デザインにもなっていると思います。(M．F)
●発想から連さんへの依頼，そして参加のデザイン，参加の建設まで，苦労をされつつも，それを乗り越えていった経緯が興味深かったです。「作業所」という施設は，その規模（建物自体および関係する方々の人数）から，「参加のデザイン」に向いているのかも，と思いました。すなわち，指導員，作業員，施設マネージャー，利用者といった関係者の意見を，しつらえ等へ反映することが設計条件的に可能だったのでは，と思いました。個人宅設計よりも関係者が多く，図書館といった施設よりも関係者が限られている，という規模における「参加のデザイン」は，設計論としても可能性がまだまだありそうですね。(T．I)
●小さいながら、とてもチャーミングな建物でした。施設の規模や用途から、町役場、スタッフ、メンバーという関係者・利用者のほぼすべてが参加できるという幸福なケースだと思います。また、設計だけでなく施工についても、断熱材（新聞紙）や陶板（土間）などに参加の機会を設けたことで、より参加体験を実感でき、施設に対する愛着につながっているようですね。それとともに、参加者の意見を聞いたり、投票で案を決めたりしながら、最終的には、美しいデザインで質の高い建物にまとめ上げてしまう建築家（連さん）の力量にも敬服しました。(R．O)
●地域住民のための福祉施設で、地域の声を反映していくことが利用者、周辺住民にとってより使いやすく、受け入れやすくなることが目に見える形で、運営、施設整備が実現されており、また、施設運営者、地域住民(利用者)、設計者の信頼関係の構築にも成功しており、とても効果があった事例だと思います。(Y．G)
●断熱材用の新聞紙を提供された方たちは、普段、さくらの家を利用しなくても、自分たちの建築物と思うことができ、みんなのものという意識が芽生えているのではないかと思いました。さらに、島の2500人のものと思えるような参加の企画をすると、公営でなくても町のものと町民が認識するように想像しています。行政財政が厳しく、民活に頼らざるを得ない状況下で、民間資本による建築物が、住民にとって公設のように認識できる可能性が、参加のデザインには秘められているように思いました。(Y．F)
●施設スタッフの発言や島内の多くの家庭が参加した新聞紙の収集協力などから、参加のデザインが単に建築物を完成させるだけでなく、地域におけるコミュニケーション・ツールとしてチカラ（有効性）を発揮した成功例に思えました。(M．O)

●離島の濃いコミュニティを背景に、地域特性にフィットした手法だったと思う。利用者の思いを「物語にする」ことの重要性を改めて感じた。(Y.Y)
●「地域の施設」との意識が、町民全体に広がっていると思う。(Y.K)
●特にスタッフやメンバーが「楽しかった」、「愛着の持てる家になった」と心から話されていたこと、記憶に残ります。(K.T)

さくらの家（加工場）内部
※土間の陶板はデザイン参加者によるもの

同・加工商品展示スペース
※クロモジの木から「ふくぎ茶」が作られる

３■参加のデザインが公共施設に根付いていくために必要なこと

●そもそも、公共施設についてはユーザーである住民の声を聞く、という姿勢を役所は基本的認識として持つべきです。その上で、どのように設計に反映させるかは様々な方法があるでしょうが、参加のデザインの効果を評価して、契約（プロポーザルや総合評価の審査、契約金額の積み上げ）の中できちんと考慮すべきと思います。(R.O)
●参加するにも、公共施設の種類（広域的に必要なものか、地域に身近なものか等)、また住民の関心の度合い（これは変えていくことが可能ですが)、が影響すると思います。参加のデザインが根付くためには、個別の施設ごとに対応するのではなく、まず、地域に身近な施設の整備運営についてはできるだけ地域の住民が自主的に関わるような社会のしくみを、市町村長の優れた見識、市町村職員の努力とノウハウの向上、これを指導するための専門家の支援により構築していくことが効果的ではないかと思います。つねに住民が関心を持つ環境を作ることが必要では。(Y.G)
●年度当初からの事業計画とその準備をできる担当者（行政 or 中間)。不特定多数が利用する施設については、プロセスに参加する人の代表性の担保。参加のデザインの過程の情報公開、広報活動。(Y.Y)
●契約手続き自体のデザインが大事かと思います。また，参加のデザインによって進められたプロジェクトについて，契約手続きや関係書類をアーカイブし，必要に応じて参照できると，効率が悪くなることは避けられると思います。個々のプロジェクトにおいて，自治体担当者および関係する専門家が，試行錯誤の工夫をされた智見をもっと活かすべき，と感じます。(T.I)
●基本設計、実施設計の期間を十分にとれるようにすること。そして、参加型にすることで設計の質が高まること、建物への利用者の愛着が高まり有効な活用がされること、さらに適正な維持管理へとつながること、などのメリットを、発注者（行政、議会)、利用者（市民)、建築家がともに理解することが必要だと思います。(M.F)
●役所や議会の志向も大事でしょうが、それはさておき、施設の規模や内容への考慮はするとして、
(1) 基本計画の段階までにおいても＜参加＞を図っておくこと、
(2) 設計者選定を、「設計者の資質判定＋設計プロセスで＜参加のデザイン＞を取り入れることを前提にした簡易プロポーザル評価」といった、応募者の過去の実績に必ずしもとらわれず、かつ、応募に際して負担の少なく、以後に参加が前提とされることを明示した方式で行うこと、
そしていうまでもなく、
(3) 基本設計の段階で参加の方式を採用すること（必要なら第三者的ファシリテーターにも加わってもらって)、かと思います。(K.T)

●参加しない、あるいは参加したくないと思う人が、一住民として行政に対して不公平感を抱かないように、プロセスの公開が求められると思います。公開する情報としては、デザインへの参加者が決まる過程、参加者が自分の意志だけでなく住民全体のために何を思っているのか、施設をつくることではなく使い続けるために考えた部分(ソフトとハード両方)などが考えられます。理屈抜きに住民が参加のデザインを「好き」と感じれば、自然と根付くと思います。そのためには、まず住民が好きな人や物のリサーチありきと思います。(Y．F)
●コミュニケーション・ツールとしてのチカラを地域が認識すること、あるいは、地域が認識できる状態を創ることが必要なように思いました。それが十分でない場合、一過性のイベントとして整理される可能性もあるように思えました。(M．O)
●整備後の施設の使い方にも「参加」があることだと思う。(Y．K)

さくらの家・見学後のフォーラム
※予定時間を超過して熱心な議論が続けられた

参加のデザインで用いられたコラージュ
※さくらの家の一角に、いまも掲げられている

４■その他、今回の企画についてなど

●連さんのコラージュ等を使った利用者との対話による設計手法の現場を見せていただき、大変勉強になりました。この参加のデザインに係われた施設利用者、町役場職員、大工さん達が皆、施設建設への関わりを楽しそうに話されていることが印象的でした。連さんの参加のデザイン力、人間力に感心しました。こうした会員活躍現場企画は勉強になり、かつ励まされます。(M．F)
●海士町は、かねてから行きたいと思っていたところなので、今回の企画はとても良かった。海士町の方々の話を聞いていて、連さんが地域の中に溶け込んで仕事をしていることがよく解った。また、隠岐の島町でも唯一の駅鈴を見ることが出来、二重の喜びだった。今回の企画の３日後あたりからフェリーは欠航になっており、離島の厳しさを思い知った。海士町の皆様、連さん、何から何までお世話になりました。ありがとうございました。(Y．K)
●事前資料を配付いただき、現地に行けば勉強になるシーンの連続と、全体に充実度の高い見学会でした。現地に辿り着くまでの距離（時間・費用など）を超える企画であったように思います。連さんをはじめ、企画・実施に携られた方々に感謝です。今回に限らず、参加者の写真の交換の出来る仕組みがあれば、と思うのですが如何でしょうか。特に集合写真についてなのですが。(M．O)
●個人的には、都会の喧騒からしばらく逃れて、リフレッシュができてたいへんよかったです。頑張っている人達に触れることで、自分自身にもパワーをもらいました。隠岐が東京より歴史と地域文化があるという事実を思い知りました。(Y．Y)
●皆さんが東京から鳥取県の米子空港経由で来られ、島根県の出雲空港経由ではないとわかり、島根の隠岐ではなく、「隠岐の國」と銘打った表記をよく目にする理由がわかったような気がします。松江市民から見た隠岐は、新潟市民から見た佐渡との共通項を感じる一方で、隠岐の四つの島それぞれのアイデンティティに目を向ける必要性も感じました。(Y．F)
●遠方の企画でしたが、参加して本当に良かったです。日本史にしばしば登場する地域であり、また日本海の離島という特殊な地域ですが、その風光明媚で豊かな天然資源・産物に驚きました。そして、以前から聞いていた海士町の地域活性化戦略については、想像していた以上にユニークで徹底したものだということを

認識しました。また、お会いした町役場の方々は、やる気の塊みたいな方ばかりでした。もちろん、さくらの家の参加のデザインも、すばらしい成果を挙げていると思います。島に行って、私も元気をもらいました。連さん、海士町の皆さんに感謝します。ありがとうございました。(R.O)

●効率的に企画され、町役場の方にも休みにも関わらず熱心に対応していただき、コーディネートされた連さんに感謝します。さらに欲を言えば、２日目も、できれば海士町にいて、例えば新旧住民の方とお話ができれば、なお実情を理解できたように思います。(企画が大変でしょうが…。) (Y.G)

●休日のところ，ご案内くださり，また，懇親の場を設けてくださり，海士町のみなさんには本当にあつく感謝いたします。私自身，まちづくりを考える上で興味深い実践がたくさんありました。是非，学生を連れて，再訪させていただきたいと思っています。ありがとうございました。(T.I)

●周到な準備をされた連さんたちに、また大いに歓迎してくださった町職員のみなさんたちに、お礼申し上げます。(K.T)

海士町（中ノ島）から見る隠岐の夕景
※かつてのカルデラ火山が3つの島と内湾をつくる

養殖に成功した春から夏にとれる岩ガキ
※最新鋭のCAS施設で凍結され、都会へ運ばれる

◆コーディネイターからのひとこと

隠岐の島、海士町の良さを感じていただくとともに、参加のデザインへの理解を深めてもらいたいとの思いから企画したのですが、皆様の反応がとてもよく、嬉しく思います。お金と時間を使っての参加であるため、プレッシャーがありましたが、海士町の方々のチームワークはすばらしく、とても助かりました。この場をかりてお礼を申し上げたいと思います。ディスカッションでは、参加のデザインの意味、公共施設発注の問題、など深いレベルまで話が及んで良かったと思います。是非、次につなげたいと思いますので、この会で参加のデザインをテーマにした討論会の場を企画してもらえばと強く思いました。(連　健夫)

「隠岐國海士町」と刻まれた銘板

海士町の関係者の方々と参加者一同